

「底が突き抜けた」時代の歩き方 448

クマは「有害駆除」される運命にあるのか

10月に入って毎日のようにクマの出没が、地震や台風と共にメディアを騒がせている。クマの人里への出没は人に怪我を負わせる機会が多くなるために、クマは次々と射殺されている。どうして今年のクマは危険を顧みずに、山から下りてくるのか。もちろん、エサを求めて人里に接近するのだ。だが、それだけではない。人とクマの棲み分けがはっきりしていた境界区域が、人の生活様式の急変によって不明確になり、その結果、かつては境界区域であった、クマが帰っていく里山は荒廃し、失われているという背景をみなければならない、という指摘もなされている。クマの生活圏である里山が失われつつある上に、夏の猛暑や度重なる台風がもたらしたブナやミズナラの実の凶作が降りかかってくるなら、クマがエサを求めて人家に近づき、その挙句人を恐れるクマが人に出くわしたときのパニックで、人を攻撃するに至る事態をどう受けとめればよいのだろう。

クマという生き物はどのような戦略をもって人里に現れ、人に危害を加えて自らも射殺されるのか。残念ながら、クマにはなんの戦略もない。だから、人に一度見つけられると、逃げ回った挙句の果てにいとも簡単に射殺されてしまう。どんなに凶暴に見え、野生を誇っていようと、有害駆除されてしまうのがクマの運命なのだ。本州でクマといえば、胸元の毛が白く三日月になっているツキノワグマであり、北海道にいるクマはツキノワグマより一回り大きいヒグマである。「有害駆除」されるツキノワグマは毎年、全国で1000頭前後に達するという。年によって増減は異なるが、年々増加傾向にあり、今年の「有害駆除」数は突出するとみられる。地域別では東北地方が多く、北陸の富山、石川、福井は三県合計で全国のおよそ一割を占めるといわれるが、石川県だけでも5月から10月13日までに83頭が捕獲、うち82頭が射殺され、推定700頭の一割をすでに越えている。

「有害駆除」数が毎年、全国で計1000頭前後とされるのは、ツキノワグマは本州と四国、九州に1万～1万5千頭ほど生息していると見積もられ、生息数の一割が捕獲の上限とされているからだ。しかし、下北半島、紀伊半島、中国地方、四国、九州では絶滅の恐れがある。彼らは落葉広葉樹林を好み、植物を食の中心としている。春は各種の草や新芽、夏はイチゴやヤマザクラなどの実、タケノコ、秋はドングリ（ブナやミズナラなどの実）やヤマブドウ、サルナシ、アケビなどを食べる。クマは森の生態系の頂点に立つ生き物（アンブレラ種）であり、体長120～140センチ、体重約80～120キログラムの大きな体を維持するために、豊かで多様な植物を必要とする。主要なエネルギー源は植物なので、大量に食べなければならないが、秋は冬ごもりに備えて特にどん欲になっ

ている。朝と夕方に活発に活動する習性で、エサを探して歩き回った結果、人里にたどりつくケースが多い。

カロリーの高いブナの実を好んで食べるクマが、養蜂箱やブドウ園などを狙うだけでなく、養鶏場を襲い、後にはニワトリの羽根と肉の切れ端が落ちている光景もみられる。そこには、クマが人里に現れるのはエサ不足のためだけでなく、人の食べ物に興味を持ちだした影響も明らかに認められる。放置された生ゴミや水産廃棄物をあさったりするのは、まさにその例であろう。農家が毎年、同じ場所に植えるトウモロコシの味を知ったクマが、同じ季節にごちそうを求めてうろつきまわるのも、同じことだ。クマが本来持っている雑食性の性向が、人間の食べ物に対する興味を際立たせ、クマの食習慣の激変を招くことも予想される。もちろん、それはクマが積極的に人里に近づくようになることを意味し、したがってクマと人との遭遇も多くなることによって、双方が被害を負うケースが増えてくるだろう。

多様な植物を大量に食べるクマはもちろん、植物を消費するだけではない。東京農工大助教授（森林生物保全学）の古林賢恒は04・10・25付毎日で、「ツキノワグマのフンには、たくさんの果実の種子が含まれる。クマは種子をあちこちに運び、森の多様性を生み出す役割を担っている」として、クマが森の“種子配達人”であることを示唆する。山梨県甲府盆地で採取したツキノワグマのフン計360個には、ヤマザクラやカスミザクラ、ミズキなど約20種類の植物の種子が含まれており、発芽能力にも全く変化はなかった。シカなど他の動物の数十倍とされるクマの行動圏を、クマに発信器をつけて調査した《その結果、クマは70種類以上の果実を食べていた。活発に動き回る日もあれば、何日も動き回らない時もあった。食べ物を求めて森を動き回り、気に入った食べ物が豊富な場所にめぐり合うと、そこにとどまる。そんな習性が垣間見えた。》

「クマが作る森は、人間にも食料ややすらぎを与えてくれる」と古林さんは訴え、クマを安易に「有害駆除」する人の身勝手さに警鐘を鳴らす。要するに、クマは森の生態系の一環として生息しているということだ。少なくとも人の手で自然の生態系が乱されることがなければ、自然気象の変化による植物の実の凶作に遭遇しようとも、その自然現象の変化の中での生態系をクマは生きているにちがいがなかった。ところが、自然気象の変化以上に人が森の生態系を乱す生活行動をとることによって、当然クマの生活環境も縮小し、脅かされ、自然の生態系そのものの乱れとしての行動を体現することになった。クマが森から人里へと下りてくる動機がエサを求めてであろうと、あるいは人の食べ物への興味からであろうと、いずれにせよ、クマの行動は自然の生態系の乱れそのものを示していることは間違いない。つまり、クマは自然の生態系の乱れを忠実に描写しているにすぎなかった。

クマが人里に下りてきて人に危害を加えるようになると、危害を加えられる人の立場からすれば、危害を加えるクマは当然、「有害駆除」されなくてはならない。しかしながら、クマの身になって考えるなら、あくまでも自然の生態系の乱れとして行動してい

るにすぎない。行動しているうちに人と突然出くわし、クマが自分の身を守ろうとして人に危害を加えることになっただけのことである。その結果、クマ自身も射殺されることになってしまう。クマにもし人が使う言葉を与えるなら、彼らは一様に、「自分たちがあなたたちのところに出没せざるをえなくなったのは、すべて、あなたたち、人が進めてきた開発によって、自分たちの生活範囲が狭められてきたからではないか」と、口を揃えて言うにちがいない。したがって、クマの身になって問題を考えるなら、クマが人に危害を加える行動は、人が人の立場で自然の生態系を乱してきた結果、自然の生態系からクマの行動を通じて正当な報いを被ることになったと、人は受けとめる必要があるかもしれない。

クマが生きられなくなる自然の生態系の変化は、当然ヒトとしての自然が、あるいは自然としてのヒトが生きられなくなる事態にほかならない。したがって、ヒトに危害を加えるようになったクマをすべて射殺して、絶滅させれば済む問題ではない。クマの絶滅はクマとヒトとが重なり合っている自然の生態系の絶滅を意味するからだ。そこでクマとの「共生」といった課題が人から提案されることになる。ここで注意しなくてはならないのは、クマと人との「共生」といった課題が、人から一方的に射殺され、絶滅を余儀なくされるクマのほうから、窮余の策として提案されているのではないことである。つまり、「共生」の提案はクマを生かすも殺すも人次第のなかで、クマからではなく人からなされているということだ。このことは、クマに対する生殺与奪せいさつよだつの権は人に握られており、クマには自分の生命を左右する決定権がないことを意味する。

クマと「共生」するために、クマの餌場である水系を再生して川に魚を呼び戻すこと、次々と姿を変えられてきた針葉樹の単一林を、広葉樹と針葉樹が混ざり合った昔ながらの天然混交林を復元すること、十分な人員の育成・配置によって規則正しい森林の管理を行い、里山の荒廃によって生じた藪を刈り、植樹を行い、炭焼きを再開するなどの国の植林事業における根底的な見直しを図ること、といった提案がなされたりするが、すべて人からの提案であって、クマからの提案ではない。クマが何を考えているかは人にはわからないので、人はクマの身になって考えることによって、自然の生態系に耳を深く傾けようとするのだ。人がクマの身になって考えることは、それほど困難なことではない。人が人の立場に立って押し進める開発が、クマの生息圏を脅かさないようにすればよいからだ。だが、そんなことはありえない。人の立場に立った開発がクマの立場に立っていない以上、どうしても人の立場が最優先されるようになってしまうからである。

いうまでもなくクマの立場とは、北海道で農林業被害が深刻化しているエゾシカの立場であり、市街地に現れる機会が増えてきたイノシシやタヌキなどの野生動物の立場であり、あるいはまた、外来種のペットとして飼われてきたが、人の身勝手に捨てられ、繁殖したアライグマなどの立場でもある。人の立場は人以外の者の立場を考えないことによって、成り立っている。人の立場が人以外の立場を考えるようになれば、もはや人の立場ではなくなる。人が人の立場に立って行動するとき、どのような場合でも人以外

の立場を排除していることに気づかなくてはならない。したがって、人が本当にクマと「共生」しようとするれば、人は人としての立場を放棄して、クマの身になって考えることから始めなくてはならない。クマが人の身になって考えることができず、クマに自らの生殺与奪の権が与えられていない以上、人はクマに対してそうしなければならない。

人がクマの身になって考えることは、本来的に人が他人の身になって考えることに等しい。他人の身になって考えることができない者が、どうしてクマの身になって考えることができるだろう。しかし、他人の身になって考えられる者でも、クマの身になって考えられるとは限らない。そこでは明らかに他人とクマとは区別されている。他人は同じ人間であり、クマは人間と異なる動物だからだ。人と動物を同レベルで取り扱えないという考えが、そこには貫かれている。だが人であれ動物であれ、相手の身になって考えることからすれば、人と動物の境界はなくなって、他人も動物もすべて区別なく自分と異なる者に属するだろう。そう考えるなら、そこに異界の死者も入り込んでよい。

クマの身になって本当に考えられる人が、他人の身になって考えられない、などということはありません。人の身勝手によって窮地に追い詰められているクマの身になって考え、クマを救出することも、他人の身になって考え、他人を救出することも、同じ人としての行為にほかならない。クマは自らの窮地から自力で脱出することができないから、クマに人の手を差し伸べることと、自らの窮地から自力で脱出できない他人に手を差し伸べることは全く同じである。たとえクマに手を差し伸べる気持の中に、クマの窮地をつくりだした人としての贖罪しよくざいの気持が加わっているとしても、だ。だから、他人の身になって考えることが、クマの身になって考えることに結びつかないということは不思議なことである。

他人の身になって考えることも、クマの身になって考えることも同じであるということとは、相手として人もクマも区別しないということだ。他人の身になって考えても、クマの身になって考えない人は、自分と異なる者の範囲が人間界から動物界にまで広がっていないのである。逆に、クマの身になって一生懸命考えようとする者が、他人の身になって一向に考えないということがありうるとすれば、本当にその人がクマの身になって考えているのかどうか疑ってみる必要があるだろう。

クマの身になって考えることは具体的には、クマの生息圏を守るための自然環境づくりの行動に直結しているだろう。そこでは直接生身のクマと向き合っているわけではない。しかし、他人の身になって考えることは、その人と向き合うことにはありえない。おそらく他人の身になって考えられない者が、クマの身になって考えようとするのは、生身のクマに向き合わなくてもよいということが大きな理由かもしれない。要するに、生身のクマから危険を及ぼされることはない点で、他人に向き合うこととは異なっている。手っ取り早くいえば、クマの身になって考えることの中に逃げているのかもしれない。クマの身になって考えているのではなく、自分の身になってクマのことを考えているだけのこともかもしれない。

クマが考えていることは読み取れる（ように思われる）のに対して、他人の考えていることは即座には読み取れない。クマが人里へ下りてくるのはエサを求めてであることは誰の目にもはっきりしているが、人の行動の場合はそれほど誰の目にもはっきりしているわけではない。いいかえると、クマの心の大半は胃袋を満たすことに向かっているが、生理的な空腹を満たすための行動にもはや向かわなくなった人の心は、いつも精神的な空腹で一杯になっているさまざまな不可解さに占められている。もう少しいうと、クマのイメージはいつも鮮明で揺らぐことはないのに、他の人のイメージはいつも不鮮明でたえず揺らいでいる。

クマは自らの生息圏を脅かされると、必ずエサを求めて人里に現れるというパターンは、人も自らの個人空間を脅かされると、必ず「エサ」を求めてどこかに現れるというパターンと重ね合わすことができるだろう。人里に現れたクマは「有害駆除」される運命にあるという悲しい出来事は、禁を犯した人は「有害駆除」される運命にあるという悲しい出来事と打ち重なっているだろう。なにがしたいのかといえば、クマが人間界に踏み入ってこざるをえない状況を人が作りだしたとき、人は人間界の中に「クマ」として存在しうるあり方を持ってしまったのではないか、ということだ。つまり、他人の身になって考えることの困難さは、人が他人に対して「クマ」になってしまっているところに原因があるのではないか。クマが人に近づくことによって、人も「クマ」に近づいたのだ。そう、人の周囲には理解を絶する他の人々が、さまざまな「クマ」として徘徊している光景が浮かび上がってくる。

人家に近づいたクマが人に危害を加えて、「有害駆除」されるニュースをテレビで見るたびに、二ヵ月前の9月14日に死刑が執行された宅間守のことが想起される。彼は小学校に押し入って8人の児童を殺害し、教諭を含む15人に傷を負わせた「クマ」ではなかったのか。少なくとも彼は他人の身になって考えたり、他人から自分の身になって考えられることを閉ざし、もはや人間であることをやめて人間以外の、たとえば血に飢えた「クマ」と化してさ迷っていたのではないだろうか。人家に近づいたクマが猟銃で撃たれて負傷した以降の、人に対する怨みに駆られた手負いのクマに似ているように思われる。宅間守の周囲の人間に対する怨念にどこまで正当性があるのか、あるいは単なる逆恨みにすぎないのか、はわからないが、彼は身近な人間に対する怨念から人間の社会そのものに対する怨念にまで、一気に突っ走ってしまったのだ。公判で彼は怨念の数々を次のようにぶちまけている。（以下、04・9・14付産経）

「付属池田小学校に入って殺傷したことは間違いありません。命をもって償いたいと思います」（初公判で起訴事実について）

「寝ているときに包丁で刺したろかと思った」（第10回公判の弁護側被告人質問で父親について）

「懲役やけがで転落の一途をたどった。学校を襲ったことは説明できんという人がいる

が、自分の中では結びついてしまった」(同、池田小事件について)

「世の中全部に腹が立った」(同、昭和60年1月の飛び降り自殺未遂後の心境について)

「顔をズタズタにしてやればよかった。『殺したる』と言ったのは本気だった」(第11回公判の弁護側被告人質問で3番目の元妻について)

「雑民の子供を殺すより、頭のいい子を殺す方が満足できる。恵まれた子がこんなけつたいなおっさんに殺される不条理を世の中にわからせたかった」(同、池田小事件について)

「(昭和61年ごろ)自分の人生を幕引きする代わりに他人を道連れにしてやろうと考えた」(第12回公判の弁護側被告人質問で大量殺人について)

「謝罪する気持ちは一切ない。やったことからして極刑しかない。死刑判決が出たら『控訴しません』という意味」(第13回公判の検察側尋問で初公判での証言について)

「法廷で名文句の一つでも残したかった。『不条理』なんて理路整然と考えられるぐらいなら、事件を起こしていない」(同、第11回公判の証言「不条理をわからせたい」について)

「死刑覚悟で事件を起こしたのだから(殺す)数をこなさなければならなかった。ミナミの商店街をダンプで走っとったらよかった」(同、弁護側尋問で池田小事件について)

「親の結婚が間違った組み合わせ。生まれたことが間違い」(同、自分の人生について)

「『のたうちまわって死ぬ』と遺族の調書にあったが、そこまで踏み込む権利はない」(同、遺族に対して)

「わしなら号泣して謝罪してもらっても何とも思わない。死刑が執行されたら新聞に載るから、それを待っていたら良い」(同、遺族、被害者に対して)

「答えたら釈放してくれるのか。絞首台にのぼるとき、刑務官に話す」(同、犯行時の状況を尋ねる検察側尋問に対して)

「わしが女、子供しかやらん(襲わない)奴やと思ったらアカン。わしをなめとる。かかってこい」(同、検察官尋問に対して)

「そういうことを言って、心臓がバクバクしとると思っているのか。早く求刑やって、判決出ればいいんや。裁判所は量刑決めるところや」(同、謝罪を求める遺族の心情を尋ねる検察官に対して)

「幼稚園ならもっと殺せたと、今でも考える」(第24回公判、最終意見陳述で)

「死刑でええ、死ぬことはびびっていません」(同)

「(刑事訴訟法の規定通り)6ヵ月以内、できれば三ヵ月以内の死刑執行」(弁護団への手紙)を望んでいた宅間は、昨年8月に死刑判決が出され、弁護団の控訴を翌9月に本人が取り下げて死刑が確定したものの、実際の死刑執行が確定から数年以降となることが多い現状からすれば、死刑確定から約一年の短期間での執行は極めて異例の早

さであった。最近のケースでは死刑確定から執行まで少なくとも4年を要しているのに、この死刑執行の早さには、刑事訴訟法の規定通り6ヵ月以内に刑が執行されなければ、国を訴えるそぶりまでみせていた宅間の「早く死にたい」という要求が背景にあったことが考えられる。「控訴取り下げが長引いて、命乞いをしているような印象を取られたくない」として、弁護団が行った控訴をすぐ自ら取り下げたことにも、自分はヤルだけのことはやったから、この世とも早くおサラバしたいという彼の心情が窺われる。

「本人が望んだとはいえ、異例の早さで執行されたことを意外に受け止めた。謝罪すべきだったのに、口にしないままで執行されたことは大変遺憾だ。彼は謝罪すべきだということは分かっていたが、社会に対する復讐心を持って起こした事件だったので、自分の行動を否定することになり（謝罪）できなかった」と、宅間の弁護人を務めた戸谷茂樹弁護士は死刑執行後、語っているが、宅間の公判や死刑執行がメディアで大きく取り上げられたのはもちろん、小学校に押し入って包丁で無抵抗の子供たちを次々と殺傷するという残忍な犯行の凶悪さだけではなく、彼が一貫して最後まで罪を認めながらも、「謝罪しなかった」点にあった。遺族は当然ながら、社会も彼に反省や謝罪の言葉を求めているのに、この男は一言も「謝罪なく」絞首台にのぼっていった、なんと人間にあるまじき凶悪な奴なのか、といった世間的な感情がそこには垣間見られる。

罪を認めながらも謝罪をしない宅間の態度から、映画『フォッグ・オブ・ウォー』のマクナマラ元米国防長官が想い起こされる。マクナマラもまた、太平洋戦争末期における3・10東京大空襲の10万人大虐殺にかかわって、後に「戦争で勝つためなら、一晩で10万人もの市民を殺してもよかったのだろうか？ われわれは戦争犯罪人だった」と述懐し、また元米国防長官の立場からベトナム戦争は「間違った政策だった」と認めながらも、けっして個人としては謝罪しようとしなかった。もちろん、謝罪しない態度は共通しているとしても、謝罪しない理由は全く異なる。宅間の場合は弁護士によれば、謝罪すると「自分の行動を否定することになる」というものであった。謝罪は屈服であり、屈服するぐらいなら事件など初めから起こさなければよかったのだ、だから屈服しないためにも謝罪なんかしない、という態度が覗ける。マクナマラの場合は、自分がすることは謝罪ではなく、なぜこんなことになってしまったのか、なぜ間違ったのか、その原因を究明することだ、という態度であった。謝罪することで自分の気を済ませないためにも、自分はけっして謝罪はしないという決意すらそこには感じられる。

要するに、マクナマラの場合はすべて戦争にかかわっており、正義や善の方向に戦争を推し進めようとしていたのに、全く相反したものになってしまった。自分は一人の人間として、「人間は何度でも同じ過ちを犯す」ということの前に立って、深く考えなくてはならないという声が聞こえてくる。しかし、宅間は人間界のこちら側にもはや留まっておらず、あちら側に突き抜けて行った者であった。「自分の人生を幕引きする代わりに他人を道連れにしてやろうと考えた」とか、「謝罪する気持ちは一切ない。やったことからして極刑しかない」とか、「死刑覚悟で事件を起こしたのだから（殺す）数を

こなさなければならなかった。ミナミの商店街をダンプで走っとったらよかった」とか、「幼稚園ならもっと殺せたと、今でも考える」という、うそぶいている感じよりも、本音すら感じられる証言から伝わってくるのは、ひっそりと一人で死ぬには社会に対する怨念があまりにも大きすぎるから、できるだけ社会に大きな打撃を与えるために、死の道連れの数を増やすということであった。

もっと死の道連れを増やせばよかったと宅間が本当に思っていたとすれば、そんな彼から「謝罪」の言葉を引き出そうとすること自体が見当外れであったという以外にない。先の映画『フォッグ・オブ・ウォー』のマクナマラ元米国防長官に言及したときにも触れたが、「謝罪」とは一体何なのだろう。どうして「謝罪」を求めるのだろう。宅間についていえば、彼が一切謝罪しないことよりも、そんな彼に「謝罪」の言葉を吐かせようとするのが、そしてそのことが人間や社会にとって重大事であるかのように思っている人が少なからずいるということのほうが、不可解に思われる。どうして多数の人が宅間から「謝罪」の言葉を引き出したがるのだろう。テレビのワイドショーなどでも一様に、謝罪しない宅間を「どういう人間なのでしょう」とあたかもあれだけの凶行を犯したのなら、謝罪して当然ではないか、といたげな雰囲気醸しだしているのは、なんとも不思議な気がしてならない。

彼の謝罪しない態度は彼の凶行からも一貫している。彼の凶行はどう考えても「謝罪」の次元を突き抜けていたからだ。彼の凶行に立つなら、たとえ彼が謝罪したくなくとも、彼は謝罪してはならなかったし、だいいち謝罪などできる立場になかった。彼にはそのことがよくわかっていた。「彼は謝罪すべきだということは分かっていたが、社会に対する復讐心を持って起こした事件だったので、自分の行動を否定することになり（謝罪）できなかった」と、弁護士が話していることは、宅間が自分の行動の上に一貫して立っていたということである。今更謝罪するなら、あんなことしなければいいじゃないか、という思いが宅間だけでなく、我々にも募ってくる。彼からすれば、「謝罪」は世間との和解を意味していた。彼は死ぬまで世間と和解などしたくなかったし、世間と交戦状態にあったのだ。しかし、そんな宅間の意思を察してかどうか、彼が謝罪を拒めば拒むほど、世間は彼の口から謝罪が洩れるのを待ち望んだのだ。

宅間が謝罪すれば、世間はその謝罪に人間らしさを見出して、彼も可哀相な人間であったとひと安心できるということなのだろうか。鬼畜にも等しいこの非道な男の中にどこか人間らしさを見出せなければ、世間はやりきれないということなのだろうか。世間が彼に頭を下げさせようとするればするほど、彼は世間に最後まで頭を下げなかった。もしかすると宅間に対する世間の憎悪は、彼が23人もの子供らを殺傷したこと以上に、彼が自らの凶行に対して一度も謝罪してみせる素振りをみせなかったことにあったのではないかと、思われるほど、世間はメディアを通して彼の謝罪に固執した。死（刑）を前にすれば、どんな凶悪犯だって、嘘でも謝罪してみせるし、そう演じてみせるのに、アイツだけは最後の最後まで世間に楯突いて逝きやがった、という歯軋り^{はざし}がどのメディ

アからも聞こえてきそうな気がする。

宅間の謝罪を遺族や被害家族が望んでいたのかどうかはわからない。彼の謝罪を目にすれば、安心するどころか、もはや還ってこない我が子のことを思って、逆に憎悪が募ってくるかもしれない。そんな家族の心情をはばかって、世間が宅間に謝罪を求めているとは到底思われない。おそらく世間は世間のために謝罪を求めたのであろう。それはなぜか。宅間もまた、我々同様にこの人間が作りだした社会の中で育ってきているからだ。彼の生涯が周囲の人間に対する憎悪と怨念で満ち満ちていたなら、その憎悪と怨念は社会が彼に与えた不幸な贈り物にほかならない。いや、彼の根性がもともとから振れていたのだとしても、その根性の振れは社会が与えたものであろう。人間は純粹培養された無菌状態の試験管の中で育っているわけではない。社会の中にはびこっているさまざまな害毒や悪や不健全な関係を呼吸する中で、宅間のような人間が現れているのであり、この紛れもない事実は今後も彼のような人間が現れるだろうことを予測させる。

大量の害毒や悪を吸引しつづければ、世間や社会の枠組み、いや、この世の枠組みすら超出してしまうということを、宅間の行動は示していたにちがいない。社会から与えられた害毒や悪を解毒剤抜きで宅間はそのまま呼吸してきたのであり、彼からすれば社会から自分に与えられたものを、子供への殺傷というかたちで社会に返してただけだ、謝罪なんかチャンチャラおかしい、ということであつたと思われる。おそらく世間が宅間の謝罪に固執したのは、社会から与えられてきたものは社会にそのまま返していくことでケリをつける、という彼の行動図式を引っくり返そうとする、その一点にあつた筈だ。もし彼が「壊れた人間」だとするなら、我々の社会がこんな「壊れた人間」を産出しているなどとは、なんとしてでも思いたくなかったのである。謝罪によって彼を我々の社会の中に回収しなければならない、というのが宅間に対する世間の最後の役割であつたといえよう。

いうまでもなく「壊れた人間」は、「壊れた社会」を映し出している。宅間の行動は「壊れた社会」がブレーキも壊れたまま、社会の中にヤケクソで突っ込んで行った挙句、子供たちが無意味に、全く無意味にとぼっちりを食らったやりきれない無惨な光景として浮かび上がってくる。再び、「死刑覚悟で事件を起こしたのだから（殺す）数をこなさなければならなかった。ミナミの商店街をダンプで走っとつたらよかった」、「幼稚園ならもっと殺せたと、今でも考える」と法廷で証言した彼の言葉を脳裏に甦らせると、二つの点に注意が向く。一つは、死を覚悟の行動だから、死の道連れは多ければ多いほどよい、であり、もう一つは、死の道連れが多ければ多いほど、社会の騒ぎが大きくなって事件が注目される、である。こう考えていくと、なにかに酷似していることに気づく。「自爆テロ」である。そういえば、北オセチア学校占拠事件も宅間の凶行現場と同様に、舞台は学校であつた。

クマの人家への接近→「有害駆除」から宅間の凶行や、最後まで謝罪なしの死刑執行と辿ってきて、そこから北オセチア学校占拠事件が垣間見えてくるとするなら、その底

に一貫して流れているのは「自爆テロ」の発想ではないだろうか。もとより、クマに「自爆テロ」は無縁である。しかし、クマが「自爆テロ」など起こす筈がないとして、我々が注目しなければならないのは、クマの「追いつめられ方」である。餓死寸前までクマは追い詰められてきた。やむなくエサを求めてクマは人里へ下りてきた。そこで「有害駆除」されることになった。クマの身になって考えるなら、あんまりではないかという声が当然、聞こえてくる。自然気象による植物の凶作に人はかかわっていなくても、自然開発によってクマの生息圏が年々脅かされているとなれば、クマがエサを求めて人家へ近づくことは自然の道理といえるだろう。クマが里山にじっとおとなしくしていないからといって、人は山から下りてきたクマを人に危害を加えるという理由で「有害駆除」することになった。

クマにはなるほど「自爆テロ」の発想もないし、クマ同士が集まって蹶起^{けっき}しようなどという、人が考える戦略をもたないけれども、射殺されようともエサを求めて人家へ近づかぬわけにはいかないという、クマの「追いつめられ方」の底には、しかもクマは人との力関係では圧倒的な劣位に置かれていることを考えるなら、「自爆テロ」が喚び起こされる自然感情が流れてはいないだろうか。宅間の場合はまさしく「自爆テロ」にほかならなかった。彼もまた、人間の社会の中で追いつめられてきたのである。彼のほうに大きく原因があったとしても、彼が求めるものは相手から何一つ得られなかった。すべてがうまくいかなかった。自分を^{かて}変えられない彼は死ぬしかないところまで追いつめられていた。周囲から自分が生きる糧^{うと}を全く与えられなくなった彼の「追いつめられ方」は、社会から抹殺される感覚であつたかもしれない。

自分が社会のお荷物として疎んじられ、社会から抹殺される運命にあることを覚ったとき、どうしてもそうとしか考えられなくなったとき、彼が自死へと追いつめられることになるのは不可避であつた。ただ宅間の場合、自分をここまで追いつめた社会に返しをしてやりたいという憎悪や怨念が心中に渦巻いていた。彼が自分の死に場所として小学校を選択したのは、できるだけ多くの死の道連れをつくりだすことによって、社会を騒がせたい、社会を悲嘆のどん底に突き落としたい、という動機からであつた。その動機に押し上げられて宅間は一直線に目的地を目指し、凶行に及んだのである。これはまさしく「自爆テロ」以外のなにものでもなかった。別にパレスチナ問題のように軍事占領や国家創設などの政治的な対立や戦争に絡んでいるわけではないが、そして組織的な闘争戦術とは無縁であつたとしても、自分の死の行動にできるだけ多くの人を巻き込むことだけを目的としている点で、宅間の凶行は紛れもなく「自爆テロ」の原形を備えていたと考えられる。

エドワード・W・サイードは「9・11」をめぐるインタビュー（『戦争とプロパガンダ』）の中で、9・11テロ実行犯が絶望的な状況に置かれている「貧しい難民キャンプの住民」とは異なる、中産階級の比較的富裕な層に属していた点で、「ガザのひどい惨状（イスラエルに大きな責任があります）の中で暮らす若い男が、ダイナマイトを

身体に縛りつけてイスラエル人の群集に突っ込んでい」く自爆テロとは一緒にできないことを踏まえた上で、こう語る。「ぼくは一度もそういうことに容赦を与えたり賛同したりしたことはありませんが、少なくとも理解することはできます - 自分の生活や身の回りのすべてから締め出されたと感じている人間、自分の仲間たち、他のパレスチナ人や、両親や、兄弟姉妹が苦しめられ、傷つけられ、殺されたりするのを見てきた人間の、すてばちな望みなのです。彼は、何かをして反撃したいのです。これは、ほんとうにせっぱつまった人間が、不当に押しつけられた状況から自分を解放しようとして訴えた行為として理解することができるでしょう。それに賛同することはできませんが、少なくとも理解することは可能です。」

9・11の自爆テロには理解も賛同もしないが、イスラエルの圧倒的な国家武力を前に、貧弱な武器しか持たない若者が抵抗の最大の武器として自分自身を爆弾と化さしめ、凶器と化さしめてイスラエルの群集に突っ込んでいく「自爆テロ」は、賛同はしないが理解できる、とサイドはいう。賛同しないのは、「自爆テロ」は問題の解決そのものをもぶっ飛ばしてしまうからだ。理解できるのは、肉親や仲間を殺された者の絶望的な怒りや憎悪を彼自身も共有できるし、その追い詰められた心情の中で一体なにができるかと考えるなら、「自爆テロ」に行きつく以外にないのを知っているからだ。

相手が問答無用で大砲や重火器や戦闘機など、ありとあらゆる軍事力を駆使してこちらを踏み潰そうとする場面にあなたが素手に等しい状態で立たされたとき、あなたはどうか。あなたは踏み潰されるに任せるか、逃げ回るか、それとも、棒切れや石ころを拾って相手に向かっていくか。屈服しないという意思を全身にみなぎらせていたとしても、あなたは自分が手に握りしめている棒切れや石ころをみて、絶望的な無力感に陥らないだろうか。相手の圧倒的な武力を前にして、どのようにすれば相手に大きな打撃を与えられるかと考えるなら、もはや失うものはなにもないあなたが「自爆テロ」に手を伸ばすのはあまりにも当然であろう。相手と自分の距離をゼロにまで近づけていくなれば、そこで圧倒的な弱者が取る戦術は「自爆テロ」以外ないだろう。問題の解決？ 一体いつの夢物語だ、ということになろう。クマの食糧的な「追い詰められ方」や宅間守の社会的な「追い詰められ方」を凝視していくと、パレスチナやチェチェンで抵抗戦術として採られている「自爆テロ」が、圧倒的に弱い立場に置かれている者たちが自分の死をもって相手に一矢を報いようとする、絶望的で悲しく、あまりにも救いのない暴力的な悲鳴として、その底に一本貫かれているのが感じられないだろうか。

2004年11月7日記